九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

DaF（ダフ＝外国語としてのドイツ語）紹介

津村, 正樹
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5353

出版情報：言語文化論究. 5, pp.157-165, 1994-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

DaF（ダフ＝外国語としてのドイツ語）紹介

津 村 正 樹

ドイツ語科の教官を中心にして「ドイツ語科とドイツ文化研修旅行」が毎年3月から4月にかけて行われるようになってもう11年目になるが，3年前からこの研修旅行参加者は，ドイツに着いてすぐにミュンヘン大学で1週間の語学講習を受講するようになっている。この講習会を引き受けているのがミュンヘン大学の「外国語としてのドイツ語」(以下DaF（ダフ）と略記）学科である。講師の方々はこの学科の専任ではないが，全員この学科を修了した人々である。

このDaF学科というものは，ドイツの大学制度の中で新しく成立した組織で，現在改組の真っ只中にある我々にとってさまざまの点で参考になる性格を持っている。今回はこのDaF学科の学生用履修要項と「DaF情報」の授業科目一覧を翻訳して，その一端を紹介したい。

さて，このDaF学科は我が九州大学においてはどの組織に対応するものであろうか。外国人のためのドイツ語，つまり日本にあっては外国人のための日本語を扱うのであるから，外国人留学生に対する日本語教育に当たっている留学生センターが一番近いようにも思えるが，実はそうではない。DaF学科では，我々の研修旅行の学生に対してドイツ語の授業をしてくれているが，それはこの学科の日常的な業務ではなくて，臨時の，いわば実習的な意味で行ってくれているのである。DaF学科が本来的に行っているのは，そのメタレベルとしての研究と教育である。つまり，外国人にドイツ語を教えること，ないし外国人がドイツ語を習得することそれ自体の位置と構造とを探求することを旨としているところなのである。従ってそこは，それまでもともと大学にあった，ドイツ語，ドイツ文学，ドイツの歴史や社会，それ自体を研究対象とする，ドイツ語で言うところのいわゆるゲルマニスティク（ドイツ学）とも違うし，また，外国人に対するドイツ語教育センターとも違ったレベルにある，いわば中間的な新しい方向性を目指した組織なのである。そういう点から言えば，このDaF学科はいわば，旧来の文学部と違ったところにその存在意義を新たな形で模索している我々言語文化部と近い位置にあるとも言えるものだと考えられる。ここにはさまざまの形で我々がヒントとして取り入れることのできることがらが少なからず潜んでいるように思われる。それが，実は今回この組織を紹介しようとする私の本意である。

ミュンヘン大学には現在20の学部がある。DaFに近い領域を扱う学部としては，例えば，「歴史学・美学学部」，「哲学，科学理論と統計のための学部」，「心理学・教育学学部」，「考古学・文化科学学部」，「言語学・文芸学学部Ⅰ」などがある。これらの学部は，日本の感覚から言えば，文学部の中の学科のように感じられるが，そうではなくて，例えば同じレベルに「物理学部」や「医学部」があるものとしての「学部」(Fakultät) なのである。DaFはその中の「言語学・文芸学学部Ⅱ」に属する下位レベルの学科 (Institut) としてある。この「言語学・文芸学部Ⅱ」にはDaFを合せて6つの学科がある。「音声学と言語コ

ミュニケーション学科」,「北欧文献学とゲルマン考古学学科」,「ドイツ文献学学科」,「バイエルン文学史学科」,「一般文芸学・比較文芸学学科」である。ちなみに DaF 学科に一番近いと思われる「ドイツ文献学学科」では「理論言語学」,「ゲルマン語言語学」,「ゲルマン中世学」,「ドイツ近代現代文学」,「ドイツ語とドイツ文学の教授法」などが研究対象となっている。

ミュンヘン大学
DaF（外国語としてのドイツ語）学科
履修要項
(1991—1992年冬学期より発効)

ミュンヘン大学の DaF 学科は,研究と教育が一体化したものである。研究に関しては,外国語としてのドイツ語,外国文学としてのドイツ文学,および異質性の観点から見られたドイツ文化一般というものが,どのように媒介され,そして理解されるか,その基盤と諸条件とを探求する。

教育に関しては,DaF 学科はドイツ人学生ならびに外国人学生を対象としている。一般的な学習目標は,履修者がさまざまの職業において,ドイツ語,ドイツ文学,そしてドイツ文化総体を外国人に対して媒介しうる,そのような能力を修得させることにある。

DaF 学科はミュンヘン大学においては主専攻としても,あるいは副専攻としても履修可能である。履修受け入れに関しては,他学科と同じ認可条件と登録期日とが適用される。主専攻では最短 8 学期（4 年間）に及ぶ DaF 学科の履修は,修士学位あるいは博士学位(文学博士）取得をもって修了することもできる。

（I） 履修内容

DaF 学科の履修内容は 7 つの領域に分かれている。

(1) 現代ドイツ語の言語学
—文法,テキスト理論,語用論,辞(書)学の各領域における口頭的,筆記的諸現象形態を有した現代ドイツ語の分析と記述
—テキスト言語学に主眼をおいた一般的言語学的方法論

(2) 文芸学および文学理論研究
—ドイツ文学作品の集中的,ないし包括的な講読,ならびに分析と解釈
—ドイツ文学史の各時代の概観
—テキスト理論,ジャンル論,ならびに必読文献検討
—異質性というテーマに主眼をおいたテーマ文芸学,ならびにテーマ比較文芸学
—ドイツ文学の外国における受容伝統の記述
—外国語教育における文学テキストの位置に関する考察

(3) 言語教育研究・言語学習研究
—AV 機器使用を含む言語媒介の方法論
—学習心理学,および指導者つきの,ないし指導者なしでの言語習得の一般的諸問題の検討
—第 1 言語,第 2 言語および外国語の習得における学習プロセスの分析と記述
—目標言語としてのドイツ語に関する誤用言語学と対照言語学
—教育装置分析と教育装置批判
—自己自身の教師体験の分析と批判（実習と結びつけて）

(4) 言語文化研究
—ルター期から現代にいたるドイツの言語文化史
—その諸変種との関連の中における標準ドイツ語の分析と記述
—言語規範研究

—文体論とレトリック

(5)　異文化間解釈学

—時間的，空間的解釈学ならびに諸文化の解釈学

—とりわけ媒介条件としての文化的異質性に主眼をおいた，比較文化記号論と異文化間コミュニケーションの理論

—とりわけ外国人文学に主眼をおいた，ドイツ連邦共和国における外国人文化の分析と記述

—ドイツ連邦共和国の文化外交政策とその仲介組織に関する学習

(6)　専門語研究

—一般言語との関連の中における重要専門語の分析と記述

—学問言語としてのドイツ語の分析と記述

—専門語教授法

—専門語辞書学

(7)　ドイツ事情（ランデスクンデ）

—ドイツ史に関する基礎知識の主体的な消化

—自ら選択したドイツ事情関係事項の研究—どのようにしてそのドイツ事情が自分の専門の中で取り扱われているか，そしてそれがどのように人文，社会科学関係の近隣科目の授業の中で学習されうるか

—ドイツ事情はどのような言語教育，文学教育と連携されうるかという問題に主眼をおいたドイツ事情の教授法

—外国人の権利問題，ならびに避難民問題，強制移住者問題の追求

(II)　教育形態

DaF 学科には次に挙げる教育形態がある。

—講義

—初級ゼミナール

—中級ゼミナール

—演習とコロキウム

授業科目は学期ごとに大学の講義一覧リストに掲載される。この一覧リストは学期開始前に書店で入手できる。さらに詳しい授業内容の解説やその他の DaF 学科の業務に関する指示は，学期ごとにその前学期終了時に入手できる「DaF 情報」で知ることができる。

この「DaF 情報」には授業科目がその目的と方法にそって簡潔に掲載されている（文献リスト付き）。授業の詳細な時間と場所に関しては図書館入口横の DaF 学科廊下の掲示板を見ること。授業予定の変更は DaF 学科の掲示板に掲示される。

(1)　講　義

講義を担当するのは，教授および非常勤講師のみである。すべての学生が受講資格を持つ。第 1 回目の講義の際に当該学期の計画が示される。第 2 週目に講義のための文献目録が配付される。基本的にすべての講義は対話形式で行われる。つまり，受講生は質問をしたり，注釈や反対意見を表明したりすることができる。

(2)　初級ゼミナール

初級ゼミナールを担当するのは，DaF 学科に関係するすべての教官である。このゼミは基本的には週 2 回の授業であるが，講義の行われない期間に集中ゼミとして行われることもある。このゼミは DaF 学科のすべての学生が履修資格を持つ。そのテーマに関わりなくすべての初級ゼミでは，学問的な作業のテクニックや学問的な参考書の扱い方に習熟することに主眼がおかれる。毎回のゼミの討論の内容に関してゼミ記録が作成され，それはゼミ担当教官の認可を経て図書館に保管される。その記録簿は DaF 学科に属する全員が閲覧可能である。

初級ゼミ出席者は全員，次に挙げることがらを行わなければならない。

—毎回出席すること。

—指定された文献を読んで次回のゼミの予

習をすること。

—ゼミ記録を作成すること。(毎回のゼミ記録担当者はゼミの開始時に決められる)

—簡単な口答発表をすること。(これは同時に自宅での筆記課題の枠ぎめにもなる)

—毎回のゼミ討論に関して簡単な自宅での筆記課題を行うこと。あるいはゼミ予習の点検のために簡単な定期筆記試験用問題をやること。

初級ゼミ修了証明書を希望するものは，次期ゼミナールの開講までに10ページ程度の初級ゼミレポートを，ゼミ担当教官と話し合ったテーマに関して書いて，提出すること。このレポートには必要事項を記入したゼミ修了証明書用紙を添えること。ゼミ担当教官はレポートを採点の上，ゼミ修了証明書にサインをすることになる。言語学ＩとIIの入門ゼミにおいてはゼミ修了証明書は，筆記試験を合格したものに与えられる。その成績は学生の成績簿に記入される。ゼミ開始時にDaF学科の事務局で登録，再登録の手続きを済ませていない学生には初級ゼミ修了証明書は発行されない。

(3) 中級ゼミナール

中級ゼミナールを担当するのは，DaF学科専任の教官のみである（つまり非常勤は担当しない)。中級ゼミへの登録(つまり中級履修の認可）は以下の条件を満たしているものに限る。

—中間試験ないしアルファ試験の合格。(履修要項第４章第１節，第２節参照)

—２つ以上の初級ゼミの修了。(初級ゼミ修了証明書による証明)

—言語学Ｉ，II入門ゼミの修了。(証明書による証明)

中級ゼミの履修は第３学期目以降可能になる。上記の諸条件が満たされているかどうか学期開始時にゼミ担当教官が点検する。

中級ゼミ履修に関するその他の条件は初級ゼミの場合と同じである。ただ，以下に述べるような違いがある。

—どの中級ゼミにおいてもかなり大量の読書計画が提示される。中級ゼミ用の推薦図書リストは図書館に準備されている。折りにふれ必要とされるようになった図書の購入は手配される。

—各学期のゼミのうちの１回は，予告された日に筆記試験日とされる。その際，指定されたゼミ必読文献全般に関して試験される。この試験に不合格になったものは１回だけ再試験を受けられる。２度にわたる試験でも不合格だった学生には中級ゼミの修了証明書は交付されない。

—中級ゼミ修了証明書を取得しようとするものは次のゼミナール開講までに，ゼミ担当教官と話し合って決めたテーマに関して20ページ程度の中級ゼミレポートを作成しなければならない。このレポートは修士論文用に考えたテーマの予行演習として役立てることができる。言語表現上の欠陥や，正書法や句読点の打ち方の誤りは減点の対象になる。あまりにひどい場合はレポートは受け付けられない。

—通常15分から20分までの口頭報告が中級ゼミ討論のために要請されることがあるが，それを行ったからといって自宅での筆記課題が免除されることはない。(ただし，両者のテーマが同一であることはかまわない)

(4) 演習，コロキウム

演習とコロキウムはすべての教官によって担当されることができ，すべての学生が出席資格を持つ。演習はいわば初心者向けで，コロキウムは上級者向けに想定されている。これらの授業の進め方に関しては特別の規定はない。学科の研究用コロキウムへの出席のためには個人的な紹介が必要である。

(III) 実　習

DaF 学科の科目のひとつに，外国語としてのドイツ語の媒介を業務とする任意の施設における監督つきの実習がある。この実習は主専攻学生にとっては必須科目である。実習は50時間以上である。実習をする施設の斡旋はDaF 学科が行う。また学生が自ら探してくることも可能である。その場合はしかし DaF 学科の認可が必要とされる。実習終了後は5ページから10ページ程度の体験報告レポートをDaF 学科に提出しなければならない。

(IV) 試　験

DaF 学科においては下記の試験が行われる。

—中間試験（主専攻学生用）
—アルファ試験（副専攻学生用）
—修士試験
—博士学位認定試験（博士試験）

アルファ試験は学科内試験であり，その他の３つの試験は学内試験である。いずれも国家試験ではない。中間試験の実施は学部の試験委員会の権限のもとにある。試験要項は当該委員会事務局で入手できる。修士試験と博士試験の実施は文学修士，文学博士学位認定委員会の権限のもとにある。試験要項は当該委員会事務局で入手できる。中間試験およびアルファ試験は遅くとも第５学期の授業開始までに受験されねばならない。

修士試験および博士試験は，主専攻にあっては最小限８学期，副専攻にあっては最小限４学期の修了を前提条件とする。これらの学期のうちの３学期，そして，そのうちの最後の２学期は原則的にはミュンヘン大学で履修されねばならない。この試験の受験許可のためには，修士試験ならびに博士試験の規程に従って，ラテン語の知識が要求される。これは，上記の試験規程に従って，ほかの，ヨーロッパ以外の文化圏において古典的であるとみなされる言語に関する知識をもって代替されうる。この申請は DaF 学科の理事会を通じて，修士学位，博士学位認定委員会の委員長に対してなされるものとする。
細目にわたっては，以下の試験規程がある。

(1) 中間試験

中間試験は，その実施に関してはミュンヘン大学の中間試験規程によって規定されており，学部の中間試験委員会によって行われる。これはすべての主専攻学生に課せられるもので第７学期までに（つまり遅くとも第６学期で合格という形で）終えられなければならない。不合格の場合は１回，ないし特別な認可のある場合に限って２回まで再試験が行われる。中間試験は DaF 学科において，それぞれ学期始めに，４時間にわたる筆記試験の形で行われる。試験の場所と時間については「DaF 情報」および，DaF 学科の掲示板の掲示で指示される。中間試験受験のための条件は以下に挙げるものである。

—言語学Ⅰ，Ⅱ入門ゼミの修了
—２つの初級ゼミの修了
—ラテン語語学力の証明

中間試験に合格し，中級ゼミ履修のためのその他の条件を満たしたものはそのままその学期の中級ゼミを受講できる。中間試験の試験範囲は，DaF 学科規程の標準文献リストにあるものである（後記第６章参照）。文献リストの３つの部門に関してそれぞれ５つの設問がされ，それに対して正しいドイツ語で答えなければならない。

(2) アルファ試験

アルファ試験（＝中級ゼミ履修のための受入れ試験）は学科内試験で，DaF 学科の副専攻学生で，中級ゼミをとろうと希望する者が受験するものである。アルファ試験は中間試験とともに各学期の始めに実施される。試験

の場所と詳しい時間に関しては「DaF 情報」ならびに掲示板の掲示によって指示される。受験希望者は DaF 学科に申し込むこと。受験者は身分証明書を提示しなければならない。第 2 学期から受験可能とされている試験は何度でも再受験可能である。合格した試験に対しては DaF 学科から証明書が発行される。3 時間の筆記試験の形で行われるこのアルファ試験の試験範囲は，小文献リストである。その 3 つの部門に関してそれぞれ 3 つの設問がされる。小文献リストは標準文献リストから A 部門，B 部門において X 印を付したものを除いたものである（後記第 6 章参照）。

(3) 修士試験

修士試験は，その実施に関してはミュンヘン大学修士学位認定試験規程によって規定されており，ミュンヘン大学修士学位，博士学位認定委員会によって行われる。修士学位認定試験規程に加えて下記の規程がある。

修士試験受験を申し出たものは，DaF 学科の教授および非常勤講師の中から一人の試験官を選ぶことができ，その試験官と修士論文のテーマについて話し合うことができる。受験者が申し出た後に学位認定委員会から当人に通知されることによってそのテーマが確定する。選ばれた試験官は通常同時に修士論文の（主）審査報告者でもある。他学部に属する者の中からも選出されうる副査は学位認定委員会によって決定されるが，その際，受験者がテーマ決定に際して試験官に伝えた希望は可能な限り考慮される。すべての受験者は修士試験用に，自ら選んだ試験範囲に応じて列挙された文献リストを提出する。この文献リストはそのタイトルの少なくとも半数は書籍でなくてはならないが，その他は論文でも認められる。このようにして指定された試験範囲は上記第 1 章で詳述された DaF 学科の 7 つの履修領域にテーマ的に準拠すべきであるが，それと同一である必要はない。副専攻学生は 3 つ，主専攻学生は 5 つの試験領域と，それに加えて，さらに広範囲にわたる 3 つのドイツ文学作品（中間試験，アルファ試験の文献リストの B 部門以外）を試験対象として申し出る。文献リストの A 部門と C 部門（副専攻学生においては，小文献リストの当該部分）は，修士試験においては試験対象とみなされる。副専攻受験者の文献リストは口頭試問の 1 週間前，主専攻受験者の場合は筆記試験の 2 週間前に DaF 学科事務室に提出すること。筆記試験においては届け出られた試験領域のうちの 2 領域は希望領域として考慮される。この 2 領域のうちの各々に関して試験官は学位認定委員会に対して 1 つの筆記試験テーマを提起する。当委員会はこの 2 領域から最終テーマを選定することになる。口頭試問の日程は予定された 2 週間の試験期間の枠内で，試験官と個人的に取り決めることができる。試問同席者は博士学位を有する DaF 学科教官 1 名である。修士論文（ここではまだ審査報告者の評価のみ）と筆記試験と口頭試問の部分評価は，口頭試問終了時に受験者に伝えられる。

(4) 博士学位取得（博士試験）

博士試験は，その実施に関してはミュンヘン大学の博士学位認定規程によって規定されており，修士学位，博士学位認定委員会によって行われる。博士学位認定試験は通常，修士試験やそれに相当する国家試験の後に受けられるものであるから，修士論文およびその他の未公刊の論文は原則的には学位認定試験（博士論文）のための準備論文として認められ，博士論文の構成部分として中に取り入れることができる。博士学位を取得しようとする者は，このテーマが将来の博士論文の部分構成テーマとして選定されるように，その旨を修士論文のテーマの取り決めの際に前もって伝えておくとよい。

博士学位取得のための口述試験（リゴロズ

ム）の内容もテーマに応じて列挙され，提出された文献リストに基づくことになる。このリストは量的には修士試験のそれに相当し，先行する修士試験のそれと半分までは同一のもので認められる。口述試験の日程はそれ用に予定された試験期間の枠内で試験官と個人的に取り決められる。その他の点に関しては博士試験の様式は修士試験のそれに準ずる。ただ，学問的レベルはさらに高度なものになり，かつ，博士学位取得試験において扱われるのは新しい学問的テーマであることが必須条件である。

(V)　科目間のつながり

修士，ならびに博士課程においてはひとつの主専攻科目と2つの副専攻科目とが必要とされる。DaF 科目は修士，博士試験の双方において主専攻としても副専攻としても選択可能である。残る2専攻科目の選択は学生の自由である。しかしながら，下に挙げる（内容的なつながりの深い）科目からは試験科目としては最高1科目しか DaF 科目と(主専攻であれ副専攻であれ）結びつけることはできない。

—理論言語学
—ゲルマン言語学
—ドイツ語と中世文学（中世研究）
—一般文芸学，比較文芸学
—近代ドイツ文学
—ドイツ語とドイツ文学の教授法
—一般言語学
—音声学と言語コミュニケーション
—話術学

文学部（＝哲学部）の他の科目は DaF 科目と自由に結びつけることができる。博士学位認定委員会への申請によって副専攻科目のうち1つはミュンヘン大学の他学部の科目の中から選ぶことも可能である。

(VI)　中間試験およびアルファ試験のための必読文献リスト

中間試験とアルファ試験の試験範囲は下記の3部門からなる文献リストである。文献リストのA部門とB部門のテキストは読み物であり，試験においてはその内容に関して通暁していることを前提とされる。C部門のテキストは学問的な参考書であり，その構成に関して，それが自由に使いこなせるほどに知識を有していなくてはならない。(X)印を付したテキストは小文献リスト（つまり副専攻学生用）からは除かれる。

A部門：学問的文献リスト
—ドゥーデン：ドイツ現代語文法　マンハイム（X）
—ヘルビッヒ／ブッシャ：ドイツ文法　外国人授業のためのハンドブック（X）
—フォン　ポーレンツ：ドイツ語史
—フルック：専門語　入門と文献目録

B部門：文学的文献リスト
—W.ボイティン編：ドイツ文学史　その起源から現代まで
—タキトゥス：ゲルマニア（X）
—ゲーテ：若きウェルテルの悩み／ファウストI
—シラー：たくらみと恋／ヴィルヘルム・テル（X）
—クライスト：ミヒャエル・コールハース（X）
—シャミッソー：ペーター・シュレミールの不思議な物語
—ビューヒナー：ヴォイツェック
—ハイネ：ドイツ冬物語
—ケラー：村のロメオとユリア（X）
—フォンターネ：エフィー・ブリースト
—トーマス・マン：トニオ・クレーガー／ヴェニスに死す（X）
—ハインリッヒ・マン：臣下（X）
—カフカ：判決／変身／掟の前で／流刑地にて／断食芸人

—ブレヒト：肝ったま母さんとその子供たち（X）／ガリレオ・ガリレイ
—ゼーガース：第7の十字架（X）
—バッハマン：30年目
—フリッシュ：アンドラ
—グラス：猫と鼠（X）
—ヴォルフ：クリスタ・Tの追想
—ビーアマン：ドイツ冬物語（X）
—シュナイダー：壁を跳ぶ男
—ハイ／フォン　シュタインスドルフ編：ドイツ抒情詩　バロックから現代まで

C部門：学問的参考書

(1)　文献目録
—言語学的文献目録
—国際ドイツ学文献目録
—ドイツ文芸学の文献ハンドブック
—ドイツ学　国際的研究発表機関誌
—キュルシュナー・ドイツ学識者目録

(2)　辞書と言語地図
—グリム兄弟：ドイツ語辞典　33巻
—クラッペンバッハ：ドイツ現代語辞典　6巻
—ドゥーデン：ドイツ語大辞典　6巻
—ドゥーデン：ドイツ語ユニヴァーサル辞典
—ドゥーデン：正書法
—ケンプケ：ドイツ現代語ハンドブック　2巻
—アイヒホーフ：ドイツ語口語地図

(3)　文法書
—ブリンクマン：ドイツ語　様態と性能
—アイゼンベルク：ドイツ語文法概論
—ハイドルフ／フレーミッヒ／モッチュ：ドイツ語文法の主特徴
—シュルツ／グリースバッハ：ドイツ語の文法

(4)　文学史と文学事典
—ジュミェガチ／シュクレブ／セクリチ：ドイツ文学小史　その起源から現代まで
—グリミガー：ハンザー・ドイツ文学社会史　16世紀から現代まで
—キントラー・文学事典　7巻
—アルノルト：ドイツ語言語圏現代文学批判事典　4巻
—コールシュミット／モーア：ドイツ文学史項目事典（レアルレキシコン）　4巻
—フレンツェル：ドイツ文学の出来事
—シュヴァイクレ：メッツラー・文学事典
—ルッツ：メッツラー・作家事典
—プレット：文体論的テキスト分析入門

(5)　言語学事典
—アルトハウス／ヘンネ／ヴィーガント：ゲルマン学言語学事典
—ブスマン：言語学事典
—レヴァンドフスキ：言語学辞典　3巻

(6)　文化事情とドイツ事情
—シュタイン：文化大時刻表　テーマから見た今日までの世界史の主要な出来事　政治，文化，宗教，経済
—ゾントハイマー／レーリンク：ドイツ連邦共和国の政治体制ハンドブック
—プレッツ：ドイツ史　—各時代と出来事　挿絵入りレファレンスブック
—プレッツ：ドイツ連邦共和国，出来事，事実，分析

(7)　定期刊行物
—外国語としてのドイツ語年鑑　1975～
—外国語としてのドイツ語
—目的言語ドイツ語。授業法と応用言語学のための雑誌
—ドイツ語を学ぶ。外国人労働者の授業のための雑誌
—外国語としてのドイツ語情報（INFO, DaF）
—専門便覧ドイツ学。ドイツ語新聞批判の言語と文学

最後にDaF学科で具体的にどのような

テーマで授業がなされているか知ってもらうために，「DaF 情報」(1993年度夏学期のもの)の中から授業テーマ一覧だけを参考のために載せておきたい。

講義：
・「語彙」
・「1933年以降のドイツファシズムとの文学的対決」
・「言語分析と言語媒介の方法」

中級ゼミナール：
・「(諸外国における) ドイツ語による少数者文学」
・「文法構造II」
・「20世紀の短編小説における空間構造」
・「授業におけるコミュニケーション」
・「配語法」

初級ゼミナール：
・「外国語授業における創作文」
・「言語批判，言語育成，言語管理」
・「外国語としてのドイツ語の授業における虚構と物語」
・「語彙獲得・外国語としてのドイツ語の授業における創造的演習」
・「外国語習得における絵の役割」
・「視聴覚文学－外国語文学の媒介のチャンス」
・「外国語としてのドイツ語　教授法的操作から，習得過程における実際のコミュニケーションまで」
・「ドイツ語文法の重点とその教材化」
・「造語法と造語法教授法」
・「音韻論と矯正音声学」
・「精神的ヨーロッパのためのアンガジュマン—作家クラウス・マン」
・「外国人学生を交えた中での語彙描写における諸問題」
・「労働現場を考える：外国語としてのドイツ語出版社」
・「初級教授法の実践的入門（テスト授業あり)」
・「専門語研究入門」
・「ドイツ語の諸変種」
・「もうひとつの詩　外国語の抒情詩（ドイツ語への翻訳の中で見えてくるもの)」
・「外国語授業におけるマスメディアの使用」
・「諸文化テーマ研究」
・「異文化間で学ぶ。ゼミ受講者と，授業の中で，日常の中で」
・「口述テキスト：言語使用の，あるいは疑似言語的，あるいは言語不使用のコミュニケーション」
・「外国人法，外国人人権」
・「ドイツ語の動詞：形態論，シンタクス，意味論」
・「芸術学と文化学としてのドイツ事情」

演習：
・「創作文演習」
・「基礎コース　言語学Ｉ」
・「基礎コース　言語学II　ディスクール言語学とテキスト言語学入門」

コロキウム：
・「文学における新現象」
・「言語分析コロキウム」
・「外国語としてのドイツ語の授業のための新教材」
・「講読演習　ドイツ抒情詩の歴史」
・「修士候補者と修士希望者のためのコロキウム」